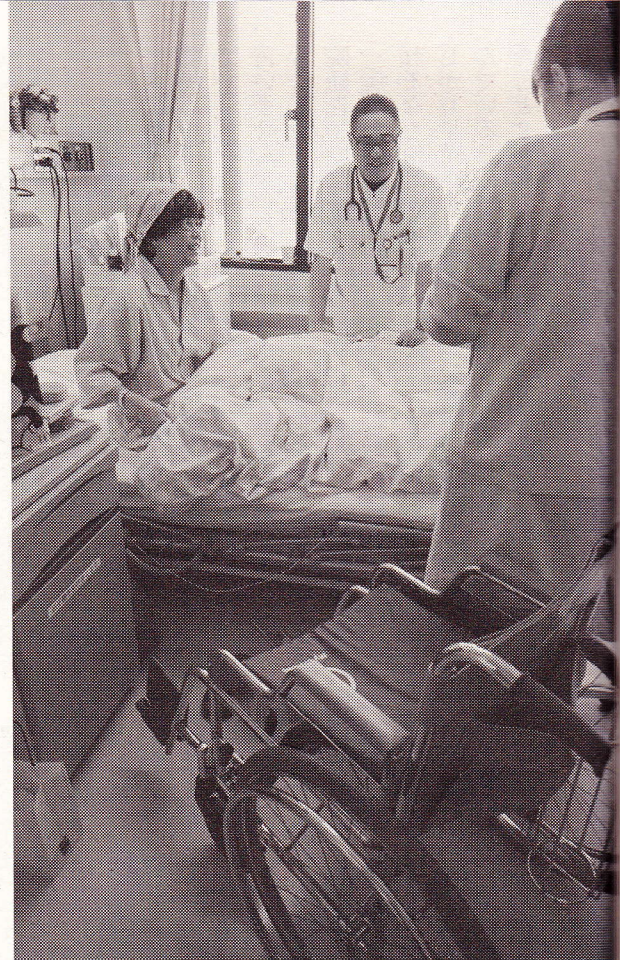


いざという時こんな人がいて 新時代の看護師『医師と

メッセンジャー



メッセンジャーナースを根付かせようとしている村松さん(左)と吉田さん(右上)。上の写真は本文とは直接関係ありません

医療安全支援センターには、そうした苦情や相談が年に4万件も寄せられている。大きな要因は、昨今の医療者の労働環境の悪化にある。医療費削減策で病院の経営状態は年々逼迫し、忙しすぎる医師や看護師は患者に対し、十分に説明する時間がなくなっている。また診療報酬をあげるために、入院日数を減らしたり、無理な退院勧告をしたりする。

そんな状況が、医師と患者の関係をどんどん悪化させていく。医療界で現状を憂えている人は決して少なくない。特に顕著なのは看護師だ。看護師は、医療の現場で、医師と患者のズレを一番身近で見ている。本来ならそれを解決する役割だが、忙しすぎたり、組織のしがらみで医師に反発できないなどの事情から、それができない現状がある。

だがそんな看護師の中から、状況を改善する動きが出てきた。それが「メッセンジャーナース」だ。客観的な立場で医師と患者の意識のズレを修正し、患者や家族が納得できる治療のサポートをする。発案したのは看護師歴43年で、訪問看護ステーションの礎をつくった功績から今年、看護界のノーベル賞ともいえる「ナイチンゲール記章」を受章した村松静子(せいこ)さん(64)だ。

「患者さんが納得できる診療を提供することが医療者の一番の使命です。しかし、それができなくなっている現状がある。私は看護師の立場から、その改善方法を考えたんです」

村松さんは民間の認定協会をつくり、資格を設けた。必要な条件として「看護師歴10年以上」「カウンセリング能力」を挙げた。そして最も必要なのは「客観的な立場に立って物事を考えられる能力」という。

村松さんの思いに多くの看護師が共感した。40年間、看護師として働いてきた吉田和子(わこ)さん(66)は認定協会の会長職についた。

「医療に不安や不満を持っている人がたくさんいることを常々感じていて、何かできないかずっと考えていたので、二つ返事で引き受けました」

メッセンジャーナース制度は昨年10月からスタート